

Le plaisir

delicieux et

toujours nouveau

水星交響楽団 第39回定期演奏会

Hector Berlioz

Symphonie fantastique op.14

Maurice Ravel

Valse nobles et sentimentales

Jacques Ibert

Suite symphonique "Escales"

2008.4.26 (土) 18時開演 (17:15開場)

ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：齊藤 栄一

ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

当楽団は、1984年に一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成され、年に2回程度のペースで演奏会を行っております。

さて、今回の定期演奏会は、全てフランス出身の作曲家による「オールフランスプログラム」です。

当団ではフランスものは、わりあいと定期的に取り上げられるジャンルなのですが、全てフランスというコンサートは初めての試みです。春から初夏に移り変わろうとするこの季節、フランス音楽のゆったりと明るい曲想はぴったりなのですが、演奏する立場からすれば、その雰囲気をかもし出すには、実はそう簡単にはいきません。そこには、フランスならではの毒というか「タダものではない」何かを咀嚼する必要があるように思います。

メインのベルリオーズは、まさに毒にうなされた青年の悪夢をそのまま曲にしたものですが、イパールの寄港地にしても、シレーヌの舞である第1曲目からアラビアチックな第2曲を経て、スペインのフラメンコにいたるまで、全て異国への強烈な憧れに満ちています。ラヴェルのワルツは、表面上は様々な速度のワルツが並んでいるだけですが、最終曲である8曲目はなぜか「エピローグ」と題され、それまでのワルツが少しずつ回想されながらも疲れ果てて終わるという形であり、なにがあったのか裏町のカフェあたりで事情を聞いてみたい衝動に駆られてしまいます。

しかしながら、日本の伝統文化がフランスに大きな影響を与えた事実や、日本の現代音楽の基礎がフランスに留学していた作曲家により築かれたことを鑑みれば、その「タダならぬもの」は確実にわれわれの中にも潜んでいるような気がしてなりません。さしあたり、この1ヶ月は、団員全員、朝食にクロワッサンとカフェオレを義務付けており(?)その成果を大いにだして、本日は、多少でも「カミングアウト(?)」できた演奏ができればと思っております。本日はごゆっくりお聴き下さい。

最後になりますが、常に変わらず情熱をもってご指導いただいた常任指揮者の齊藤先生、それから練習会場のご提供をはじめ様々な面でサポートいただいている一橋大学管弦楽団の皆様、そのほかご指導いただきました多くの皆様に、改めて厚く御礼申し上げます。



水星交響楽団委員長 植松隆治

ラヴェル 高雅で感傷的なワルツ

イベール 交響組曲「寄港地」

— 休憩 —

ベルリオーズ 幻想交響曲「ある芸術家の生涯の挿話」 ベーレンライター版

齊藤 栄一（さいとう えいいち）／指揮

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には、京都大学交響楽団と共に二週間に渡りドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。1982年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、プリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

1984年より、水星交響楽団の常任指揮者に就任。1995年には東京文化会館で水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団、佐多達枝バレエ団と、完全舞台形式「カルミナ・ブラーナ」、ラヴェルの舞踏交響曲「ダフニスとクロエ」全曲を指揮。最近では「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演で、神奈川フィル、東京シティ・フィルを指揮。昨年は、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作（4台のピアノと打楽器）を指揮した。

現在、明治学院大学文学部芸術学科教授。



水星交響楽団（すいきょう）／演奏

1984年、一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成。モーツァルト、ブラームス、ベートーベンなどの名曲はもちろんのこと、マーラー、ショスタコービッチ、ストラヴィンスキーらの大曲、アマチュアでは滅多に取り上げられることのないバルトーク「中国の不思議な役人」（全曲版、もちろん合唱付）、ラベル「ダフニスとクロエ」（全曲版、合唱、しかもバレエ付）まで、幅広いレパートリーを誇る。

熱気あふれる演奏で、観客に想定外の感動を与えます。絶対損はさせません！



曲目紹介 1

ラヴェル 高雅で感傷的なワルツ

作曲者のラヴェルは、この曲の楽譜の冒頭に、こんな言葉を掲げています。

…Le plaisir délicieux et toujours nouveau d'une occupation inutile.

直訳すると、「無益な活動の、無上の、常に新鮮な快楽」。これは、ラヴェルと同時代の詩人アンリ・ド・レニエが書いた小説の一節だそうです。どんな文脈でこの言葉が書かれているのかわからないのですが、勝手に解釈してしまいますと、

「役に立たないことを一生懸命するって、実はとっても心地よい。そして常に新たな楽しさがあるよね…」

こんな感じでしょうか。

「うん、うん、そうだよ」と、共感を覚えた方は、立派なラヴェル通？

さて、彼は、この言葉に、どのような意味を含めたのでしょうか…

モーリス・ラヴェルは1875年生まれ。「高雅で感傷的なワルツ」は、1911年にピアノ独奏曲として作曲され、翌年の1912年にオーケストラ用にバレエ曲として編曲されました。編曲の期間は、わずか2週間だったそうです。

「ワルツ」。ラヴェルは、この3拍子のリズムを、「悪魔のごとく運命的なリズム」と言っていたそうです。そして、「創造者の中で音楽家の地位が一番高いのは、ダンスの音楽を作曲できるからだ。」とも。彼は、「悪魔のダンス=ワルツ」を、人間の心と体の深いところに直接動きかける「運命的なリズム=音楽」と捉えていたのではないのでしょうか。

「高雅で感傷的なワルツ」。この曲名は、シューベルトの「34の感傷的なワルツ」

「12の高雅なワルツ」といった作品からとられており、ラヴェル自身この曲はシューベルトを手本にして作曲したと語っています。



この曲は、8つの部分（7曲のワルツと、エピローグ）から成り、切れ目なく演奏されます。

<第1ワルツ>（約1分） 全オーケストラの強奏で始まる、快活で明るいワルツ。うきうき気分。

<第2ワルツ>（約2分） 一転落ち着いた、静かでゆっくりしたワルツ。ハーブに伴われたフルートのソロが印象的。お昼寝気分。

<第3ワルツ>（約2分） オーボエの素朴な旋律

が、弦楽器に引き継がれる。ほのぼのの気分。

<第4ワルツ>（約1分） 下降していく旋律が、とりとめもなく流れていく。気まぐれ気分。

<第5ワルツ>（約1分） ゆっくりしたテンポ。一音一音確かめるような旋律。転調の妙。

<第6ワルツ>（約1分） もぞもぞと動く感じの、らせん階段を上り下りしていくような音楽。2拍子系と3拍子系が交錯する面白いリズム。そわそわ気分。

<第7ワルツ>（約3分） 第6ワルツから引き継がれるチャーミングな序奏に続いて始まる、心が浮き立つようなワルツ。ちょっとミステリアスな中間部をはさんで、繰り返し。全オーケストラの強奏による、大団円。

<エピローグ（第8ワルツ）>（約4分） これで終わり？と思ったときに始まる、もう一つの、濃密な夢の世界。非常にゆっくりした、うたた寝してしまいそうなテーマの合間に、各ワルツの主題が回想されては消えていく。最後に、第2ワルツが回想され、消え入るようなエンディング。おやすみなさい。



ラヴェルの音楽。そこにあるのは、「理屈抜きの快楽」。

人間の「頭」や「精神」ではなく、もっと無意識的な、本能的な部分に、直接動きかけるラヴェルの音楽。

音楽は、人間にとって、「役には立たないもの」。

であると同時に、「無くってはならないもの」。

そして、「常に新しい快楽を与えてくれるもの」。

「無益な活動の、無上の、常に新鮮な快楽」

この言葉は、ラヴェルにとっては「作曲という行為そのもの」のこと。

そして、我々オーケストラにとっては、「今日ここで演奏している」こと。

そして皆さんにとっては、「今ここでこの音楽を聴いている」こと…。

そういうことなんだろうなあ、と思います。

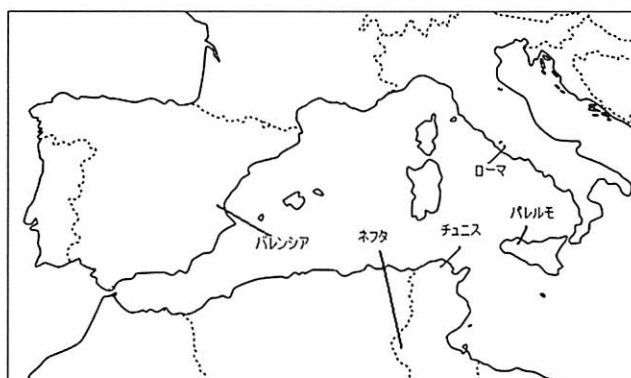


（高橋（Perc.）記）

イベール 交響組曲「寄港地」

ジャック・イベール（1890～1962）は20世紀前半に活躍したフランスの作曲家です。パリの下町で生まれ育った生粋のパリジャンで、残っている写真を見ると“口ひげをはやした小粋なおじさん”といった感じ。イベールの音楽は明快で聴きやすく、ユーモアとエスプリに富んだ素敵な作品をたくさん作曲しています。主な作品は「交響組曲パリ」「フルート協奏曲」「ディベルティメント」「海の交響曲」「アルトサクソフォンと11の楽器のための室内小協奏曲」「架空の愛のトロピズム」等々。映画音楽や劇音楽も手がけています。その中でも最も有名な代表作がこの「寄港地」です。

「寄港地」はイベールが地中海各地を旅したときの印象をまとめた作品で3つの曲から成り立っています。第1曲ローマ～パレルモ、第2曲チュニス～ネフタ、第3曲バレンシアと地中海各地の都市の名前が付いていますが、そ



れそれぞれどこにあるか分かりますか？地図を見てください。もし第1曲から第3曲まで順番に旅したとすると、イタリアから出発して北アフリカを経由、スペインの東岸に到着。地中海の南半分をぐるりと旅することになります。ちなみにこの中で筆者が行ったことのあるのはローマだけ……。ああ行ってみたい豪華地中海クルーズ……。



<第1曲：ローマ～パレルモ>（約7分） 海の上の霧に包まれた静かな夜明けの情景から始まり、やがてダンスのリズムが沸き上がり人々の活気溢れる様子が描かれます。最後にそれらは薄れて、曲の冒

頭に現れた海上の霧の中に消えてきます。パレルモはブーツ（イタリア半島）のつま先が蹴っているような石の位置にあるシチリア島の中心都市。シチリアと言って筆者が連想するのは、マフィア・オリーブオイルを効かせたおいしい料理・豊かな自然・“タベの祈り”等々ですが皆さんはどうでしょうか？

<第2曲：チュニス～ネフタ>（約3分） パレルモの対岸にあるアフリカの港街チュニスと内陸部の砂漠ネフタへの旅の印象が描かれています。この曲の聴き所はとにかくオーボエが奏でるエキゾチックな魅力溢れるなが～いメロディー。オーボエ吹き垂

涎の一曲です。イベールは砂漠で実際に聴いた歌を元にしてこのメロディーを作り上げたと言われています。砂漠の中で族長達に囲まれ椰子酒を飲みながら音楽を聴いているイベールが思い浮かびます。

<第3曲：バレンシア>（約6分） 地中海に面したスペインの港町バレンシア。曲の冒頭からスペインのリズムと歌が溢れます。豊かな響きの中、バレンシアのにぎやかな光景が描かれて色彩感たっぷりの曲です。バレンシアと言えば、オレンジ……。以外はすぐには思い浮かびませんが、実は有名なスペイン料理パエリアはバレンシア地方が発祥の地らしいです。

3つの曲で描かれる地中海の印象。音楽での地中海クルーズを存分にお楽しみ下さい。



(NYO記)

曲目紹介 3

ベルリオーズ 幻想交響曲「ある芸術家の生涯の挿話」 ベーレンライター版

こんなに人を愛したことはありますか

先日、数少ない、離れた年下の友人のひとりから久しぶりに電話を受けた。きけば、大失恋したという。大して効果を発揮したとも思えない、いくつかの慰めの言葉をかけ、今度食事でもしよう、と電話を切ったのだが、およその顛末をきく中、たずねられた。こんなに人を愛したことはありますか、と。

社会に出て、結婚をして、三十路は何年か前にゆっくりと過ぎた。いくつものしあわせな愛に囲まれ、その裏返しの、いつくかの哀しみにも時々出会う。私を守ってくれている愛と、友人のいう愛とはきくと少し違って、友人の「こんな」がどんなであるかは、その声色でしか推し量ることはできなかつたけれども、確かにあった。

でも、記憶の事実はどこか客観的で、友人の気持ちに近づこうと、更に自分の中の自分に呼びかけた。それをビビッドに感じていた頃の自分。でも、(歳を重ねるといふことの、いいことでも悪いことでも)それはすぐにはみつからない。というより、なかなか湧き上がってきいてくれない。

音楽の効用

でも、私はその気難しい泉に向けるための、特別な呼び水を知っている。まるでタイムマシンで過去のある時刻を指定できるように、その時の自分の周りの空気を、ひと息に、まさに時空を超えて出現させる魔法の水。

それは私にとっては、『幻想交響曲』だ。私がこの曲と初めて会ったのは二十歳を過ぎた頃で、それを感じていた只中、この曲のもつ空気に魅せられた。曲にも片想いをしたといってもいい。

そもそも、曲自体が赤裸々な恋の話。

恋をする前の予感、恋と気づくまでに漂う霧が

かったような気持ちや胸騒ぎ。意識したときの自分ではコントロールできない高揚感、きこえる自分の鼓動。手が届きそうで届かない、相手の後ろ姿。応えを待ち焦がれてしまう切なさ、反応のない時の淋しさ。叶わないと知ったとき、相手が憎らしくみえること。その後の自虐的な気分。

それらが次々と湧き上がっていく。

ある芸術家の生涯の挿話

作曲家ベルリオーズの28歳の時の、彼自身の悲恋の経験によるといわれている曲。1831年と、ベートーベンの直後とっていい時代にもかかわらず、大編成のオケで特殊奏法まで使い、最後には悪魔の世界まで描き出す。

曲全体と5つの楽章に、標題と短い筋書きが添えられていて、曲のイメージを膨らませてくれる。初めて曲をきく人も、第1楽章でAllegroになってからフルートが奏でる主題が、片思いの彼女であることを押さえて、次の筋書きを辿っていけば、十分楽しめる。(以下、全音楽譜出版社ポケットスコアより抜粋。)



とても敏感で、豊かな空想力に恵まれた若い音楽家が、希望のない恋愛によって深い絶望におちいり、麻薬を飲む。それは彼を殺すのには至らなかったものの、彼は、奇怪な幻想を伴った深い眠りにおちた。彼の感覚や感情、記憶が、麻薬で冒された彼の心を通過していく時、それらは音楽的な像に変えられていった。彼の思い抱く恋人は、とあるひとつの旋律、絶えずつきまとい、何度も繰り返し帰ってくる主題(固定観念“イデーフィクス”)となる。

第1楽章 夢・情熱 (約15分)

最初、彼は魂の疲れや、漠然とした渴き、薄暗い憂鬱、そしてあてのない喜びをおぼえる。それらは、彼が恋人に出会う以前に経験したものである。

それから彼女によって靈感された爆発的な恋愛、精神錯乱した苦悩、やさしさへの復帰、宗教的な慰めがおとずれる。



第2楽章 舞踏会 (約7分)

舞踏会の時、騒がしさと、華やかなお祭り騒ぎのさなかにおいて、彼は再び恋人を見出す。

第3楽章 田園の情景 (約16分)

田園における夏の夕方、彼は二人の牧人が羊飼いの笛でお互いに呼び合っているのをきく。このような環境の中で田園的なデュエット、風によってやわらかくゆれる木々のおだやかなざわめき、最近彼に知られるようになった希望へのある根拠—これらのものが全てひとつになって、彼の心は穏やかな静けさによってみだされ、彼の空想には明るい色彩がつけられる。

しかし彼の恋人があらためて現れ、痙攣が彼の心におこり、そして彼は暗い予感によってみだされる。もしも彼女が彼を捨てたならば？

牧人の一人だけが彼の田園的な歌を再びはじめる。陽は落ちる。遠くに雷鳴が響く—孤独—静寂。

第4楽章 刑場への行進 (約5分)

彼は恋人を殺したことを夢見る。彼は死刑を宣告され、刑場にひかれる。その行列には、ある時は憂鬱で荒々しく、またある時は荘重で華やかな行進曲が伴う。

騒がしい爆発は直ちに規則正しい歩みの重々しい響きによって続けられる。最後に、愛への最後の想いのように固定観念があらわれるが、それは斧の落下によって切り取られる。

第5楽章 魔女の祝日の夜の夢 ~ 魔女のロンド (約10分) 彼は魔女の祝日—それは彼自身の埋葬でもあるのだが—に出席していると思っている。

それは、幽霊や魔法使いやあらゆる種類の化物の怖ろしい群れによって囲まれている。無気味な音、うなり音、キーキーという笑い声、遠くからの叫び声、それらにまた他のものが応えているように見える。

彼の恋人の旋律がきこえてくる。しかしそれは、気高さや慎ましさを失っている。そのかわりそれは今や卑しい踊りの調子、つまらないグロテスクなものとなっている。

彼女は魔女の祝日にふさわしい喜びの挨拶を受けて到着する。

彼女は悪魔の宴に加わる。そこで葬式の鐘「怒りの日 (Dies Irae)」※の滑稽な旋律が響く。魔女の踊り。その踊りと「怒りの日」とが一緒になる。



時は過ぎ去らず…

今日、自分にとっての、とっておきの曲を演奏できる。

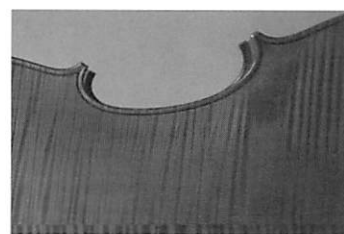
この曲に対して感じるものは、あの頃とは違う。いや、違うというより、上にもう一層、自分の過ぎてきた時間が重なって、古酒のような、また別のものになっている。かつての自分と自分を包む空気を、少し客観視しながら振り返りつつ、もう一度味わい直すような。

時を重ねて演奏することの意味が、わかりかけているような気がする。

今日、ひょっとすると、また別の効用を与えてくれるのかもしれないと、甘い期待をつい抱く。

でも、魔法の水も、草津のお湯でもできないことがある。

件の友人が、今日この席にいませんように。



(ヤングピープルズ・コンサートの日本語版DVDを切望するチェロ弾き)

※ 怒りの日 (いかりのひ、Dies irae) Wikipediaより引用。

終末思想の一つ。キリスト教において世界の終末、神あるいはキリストが過去を含めた全ての人間を地上に復活させ、その生前の行いを審判し、神の主催する天国に住ませ永遠の命を授ける者と地獄で永劫の責め苦を加えられる者に選別するとの教義、思想。または、それが行われる日。

グレゴリオ聖歌の「怒りの日」の旋律は、修道士セラノのトーマス (1250年没) によって選定され、レクイエムの怒りの日で歌われていた。しかし、ベルリオズの「幻想交響曲」の第5楽章、リストの「死の舞踏」(Totentanz) に引用されてから「死」をあらわすものとしてクラシック音楽の作曲家によってしばしば引用されるようになった。

水響とフランス音楽 ～齊藤栄一さんと語る

水響の十八番レパートリーは何か？と尋ねられたら、もちろん「マーラー！」と答えます。交響曲のチクルス（全曲演奏）は後8、9番を残すのみ。アマチュアでやること自体が困難な「復活」をすでに2回も取上げていますのだから。

でも、そうなんです。実はフランス音楽も水響のレパートリーの重要な柱になっているのです。特にラヴェル！極めてレアな「ダフニスとクロエ」全曲演奏を含めて過去に8曲も取上げているのです。

エスプリ難しい 学生時代なら絶対却下

私が一橋大学管弦楽団に在籍していたころ（もう20年前になるんだなあ。。）の選曲会議を振り返ると、ラヴェル、ドビュッシーの曲が候補に上がっただけで、「難しい」「出来っこない」という理由で却下されたものです。当時を振り返ると、自分たちってロシア音楽を若さに任せて熱く弾く「根性弾き」が得意だったような気がします。フランス音楽って、ただメロディーを弾けばいいってもんじゃない。込められたエスプリ、しゃれた雰囲気、響きの美しさを表現しないといけないんですよ。（でも、サマコンでサティの「パレード」を取上げた記憶もあるが（笑）。）それが、どうしたものでしょう。卒業生たちが水響という社会人オケに入ると、突然、フランス音楽を得意技にしてしまう。そんなわけで、その理由を検証するために、常任指揮者の齊藤さんと一緒に演奏史を振り返ってみます。

好奇心の強さで「マ・メール・ロア」

第1回定期から、いきなりラヴェルの「マ・メール・ロア」が登場します。それって無謀な挑戦だったのでしょうか？それとも曲への憧れ、好奇心の現れだったのでしょうか？「後者だと思えますよ」と齊藤さん。

齊藤さんはもともとフルート奏者。中学時代からランパル、ニコレらフランス系の奏者たちが、フランス近代の作曲家、すなわちドビュッシー、ブーランク、ミヨー、イベール、オネゲル、デュティユー、ブーレーズが書いたフルートの名作に親しんでいたとのこと。そうなのです。「マ・メール・ロア」は齊藤さんが初めて指揮したフランスのオーケストラ音楽でしたが、その段階でフランス音楽のエッセンスはすでに齊藤さんの体に入っていた。おそらく、指揮棒からほとぼしるのを待っていたに違いありません。

転機は「スペイン狂詩曲」 ゴージャスな音色

フランス音楽を取上げる頻度が増したのは13回定期以降です。おそらく、節目は15回定期でしょう。ベートーヴェンの「田園」と共に、ラヴェルの「スペイン狂詩曲」「ラ・ヴァルス」「ボレロ」を取上げているのです。水響のフランス音楽の中で、齊藤さんが印象に残った曲として選ばれたのは、その時の「スペイン狂詩曲」でした。「苦労したけれど、その甲斐あってゴージャスな音色を結構うまく出すことができましたから」



伝説の「左手」若林顕さん

以後、水響のフランス音楽は名演の記憶とともに語り継がれるようになります。その成長ぶりは、私たちが演奏面でも運営面でも力を付け、都心のクラシック専用ホールで常打ちできるようになった時期に重なっているのです。

熟成「ダフニスとクロエ」で踊るタクト

今や伝説となっている23回定期。柿落としから間もない東京オペ

- 第1回1985年3月2日 一橋大学兼松講堂
ラヴェル「マ・メール・ロワ」組曲
(アンコール) ラヴェル「亡き王女のための
パヴァーヌ」
- 第7回1988年10月16日 くにたち市民芸術小ホール
ドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」
- 第13回1991年9月22日 杉並公会堂
プーランク「牝鹿」
フォーレ「ペレアスとメリザンド」
- 第15回1992年10月3日 立川市市民会館
ラヴェル「スペイン狂詩曲」
「ラ・ヴァルス」
「ボレロ」
- 第17回1994年2月6日 サントリーホール
ドビュッシー「夜想曲」
(アンコール) サティ「ジムノペディ第1番」
- 第19回1995年5月28日 中野ZEROホール
イベール「寄港地」
- 第21回1997年5月18日 立川市民会館
プーランク「グローリア」
- 第22回1997年9月21日 武蔵野市民文化会館
(アンコール) シャブリエ「狂詩曲スペイン」
- 第23回1998年8月21日 東京オペラシティ
ラヴェル「左手のためのピアノ協奏曲」
- 第24回1999年3月14日 サントリーホール
デュカス「魔法使いの弟子」
ラヴェル「ダフニスとクロエ」全曲
- 野外音楽会2000年8月19日 くにたち郷土文化館歴史庭園
シャブリエ「狂詩曲スペイン」
ラヴェル：マ・メール・ロワより「美女と野
獣の対話」「妖精の園」
- 第28回2001年6月10日 文京シビックホール
ドビュッシー「海〜3つの交響的素描」
- 第30回2002年8月25日 東京オペラシティ
ラヴェル「道化師の朝の歌」
- 第2回チェンパーシリーズ2003年1月26日 第一生命ホール
ミヨー「プロヴァンス組曲」
イベール「ディベルティメント」
- 第35回2005年9月25日 ミューザ川崎
ラヴェル「ラ・ヴァルス」

ラシティの注目度が高かったため、入場できないお客さんがロビーにあふれました。その時の目玉はラヴェルの「左手のためのピアノ協奏曲」。「若林顕さんの独奏が圧倒的でした」と齊藤さん。

日本を代表する振付家の佐多達枝さんと組んだバレエ、合唱付き、すなわち完全舞台形式の「ダフニスとクロエ」も忘れられません。『「ダフニス」はタレとスープ、麺が絶妙にブレンドされた『せたが屋』のラーメンのようなもの。じっくり練習して熟成させないと豊かな響きは出ない。だから、練習しましたね。バレエ団との合宿では3回連続で全曲を通したこともありました』と振り返るのは、コンサートマスターだった鈴木尚志さん。

2回のバレエ公演を経て望んだ24回定期は感動的でした。ビデオを見直すと、齊藤さんのタクトが踊っているのです！「なによりも全曲を暗譜で振り、振り間違えることもなくやりとげたことの達成感がありました」と笑顔で語ります。



第24回 ダフニスとクロエ

他にも「伝説の名演」ってありましたね。19回定期で「寄港地」を初演した時は、野口秀樹さんのオーボエソロが素晴らし過ぎ、齊藤さんが演奏後に立たせるのを忘れてしまったとか。24回定期の「魔法使いの弟子」では富井一夫社長のファゴットと岡坂博誠さんのバスクラリネットの味のある掛け合いがサントリーホールを不思議世界に変えました。

28回定期の「海」は名演ラッシュ！上田覚さんの全身を揺らしながらのオーボエソロは、海のうねりを体現しているようでした。高橋淳さんのティンパニーが波の戯れとか、波濤とか、海の

様々な表情を彫琢していました。個人的には、野外演奏会の「マ・メール・ロア」が懐かしいです。その時、私は司会をやってまして、ミステリアスな響きが夜空にゆらゆらと溶けていく感じを遠くから目撃して、ゾクゾクした記憶があります。

相性の良さは、研ぎ澄まされた感覚から

さて、いよいよ、まとめです。水響とフランス音楽の相性について考えてみましょう。まずは齊藤さん、フランス音楽の特色って何でしょう？「感覚と表現とのあいだに妙な精神論や主知主義が介在しないこと。それだけに、感覚がつねに研ぎ澄まされていないといけませんが、それが同時に醍醐味でもあります」。なるほど。よく植松委員長が「ラヴェルをものにするために朝食にカフェオレとクロワッサンを食べるように！」と、言ってましたが、それだけではダメなんですね。「ちなみに、私は朝食にブルーベリージャムをたっぷりつけたパンとコーヒー、それにフルーツ入りのヨーグルトを欠かせません。その一方で、寿司も大好きですから」と齊藤さん。

相性がいいのはどうしてでしょう？「そのことの原因が指揮者に少なからずあるとするなら、それは、僕自身が、理詰めで物を考える『構築的』な人間ではなく、多分に『感覚的』な人間であるからかもしれません」。

確かに水響は「感覚的」な人が多いかも。私だってそうだ。いや、私は直感的で大雑把なだけか。こないだの練習でも齊藤さんに注意されましたっけ。「フランス音楽は気合や根性で弾かないで下さい。音や響きの美しさしかないんですよ。そのためには絶対に音程を合わせて下さい！！」

ちなみに、齊藤さんの興味のあるフランス音楽は、メシアンとデュティユーだそうです。これからも、水響のフランス音楽をごひいきに！よろしくお願いします。



祐成秀樹 <http://blog.yomiuri.co.jp/popstyle>

編集後記

演奏会をやるために、それぞれの持ち場でみんな仕事してんだなあ、てこと、今回、プログラム係を拝命して、今更ながらわかった。いつも何気なく眺めていた過去のプログラムをまじまじと見て、ありがたやありがたやと思いました。さちよさん、今までおつかれ様！

それにしても「デザインまで全部手作り」でやっていたとは・・・今回は、他力本願でなんとか乗り切ったものの、次回以降、かなり不安・・・。さちよさん、これからもサポートよろしく?! (ノムラタロウ)

水星交響樂團



◆ 常任指揮者
齊藤 栄一

◆ コンサートマスター
米嶋 龍昌

◆ トレーナー
木村 康人
佐藤 雄一
山田 祐治

◆ 第一ヴァイオリン
大木 多朗
黒崎 ちづる
清水 千晶
鈴木 尚志
鈴木 真由子
鈴木 美沙
滝澤 蘭
豊田 由起
松本 祥世
宮川 雅裕
山田 悠介
祐源 蘭

◆ 第二ヴァイオリン
荒瀬 俊
岡 千里
小笠原 綾
黒川 夏実
相楽 美帆
篠木 悠介
祐成 秀樹
鈴木 牧
土屋 和隆
徳地 伸保
野口 直美
野村 国康
前田 啓

◆ ヴィオラ
有井 晶
井上 拓
太田 文二
小笠原 裕子
尾崎 正峰
川俣 英男
金 純子
田北 佐和子
田中 裕子
林 昌弘
三上 さやか
渡辺 愛子

◆ チェロ
伊藤 みなみ
今村 文子
上竹原 修一
鈴木 皇太郎
高橋 幾多郎
田代 愛
橋 温子
東郷 丞
仲村 正江
花川 耕介
日吉 実緒
能岡 雅人

◆ コントラバス
阿部 洋介
大西 功
刈田 淳司
北畠 麻由
高橋 真弓
長屋 裕大
野村 岳夫
福原 祥公

◆ フルート
川崎 裕恵
中澤 高師
西村 かよ子
本田 洋二
横田 慎吾

◆ オーボエ
斎藤 暁彦
進藤 彩
野口 秀樹
長谷川 実里

◆ クラリネット
大山 泰広
西村 伸吾
福澤 佳子
横地 篤志

◆ ファゴット
赤羽 由衣
金谷 蔵人
長谷川 美奈
富井 一夫

◆ ホルン
伊集院 正宗
岡本 真哉
倉矢 忠和
桑名 久美
小松 泰三
島 啓
山形 尚世

◆ トランペット
家田 恭介
石本 慎
金子 恭江
七五三 直人

◆ トロンボーン
小笠原 剛
高橋 康昭
福澤 親

◆ バストロンボーン
佐々木 英王

◆ チューバ
植松 隆治
小林 啓人

◆ パーカッション
石川 誠
梶浦 未紀
佐藤 隆
高橋 淳
椿 康太郎
山本 勲
吉村 恵一
渡辺 麻子

◆ ハープ
東森 真紀子
矢澤 みさ子

◆ チェレスタ
藤木 絵里



今後の水響演奏会予定

第40回定期演奏会

2008年11月24日(月・祝) マチネ(昼公演)予定
すみだトリフォニーホール大ホール
ドヴォルザーク 交響曲第9番「新世界より」
ストラヴィンスキー バレエ音楽「春の祭典」

第40回定期と同じプログラムによる名古屋公演

2008年10月12日(日)
愛知県芸術劇場 コンサートホール